2012年度卒業研究

韓国の学歴社会とプロテスタニズム

藤女子大学文学部

文化総合学科　0915069番

氏名　　種田恭子

担当教員　　野手修

目次

はじめに・・・P1

第１章　プロテスタント
１- １　プロテスタントの起源・・・P2
１- ２　特徴・信条・・・P3
１- ３　職業に対する勤勉さ・・・P4
１- ４　隣人愛・・・P4
１- ５　韓国への参入・・・P5
１- ６　宗教文化の展開・・・P6
１- ７　韓国のキリスト教の特徴・・・P7

第２章　韓国の教育政策
２- １　1940 年代～1950 年代・・・P8
２- ２　1960 年代～1970 年代・・・P9
２-３　1980 年代・・・P9
２-４　1990 年代・・・P11

第３章　李明博を通してみるプロテスタント精神
３-１　幼少期・・・P13
３- ２　高校生・・・P14
３-３　大学生・・・P14
３-４　現代建設入社・・・P15
３-５　スピード昇進・・・P16
３-６　社長就任・・・P17

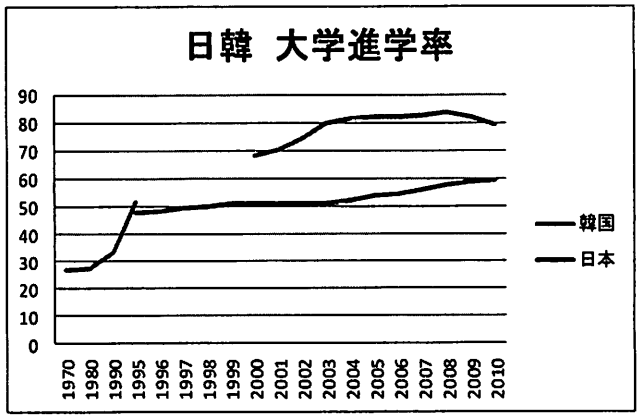
おわりに・・・P19

参考・引用文献・・・P20

はじめに

厳しい受験戦争と競争社会で知られる韓国。大学・専門大学への進学率は 83.3%（2008 年）と、日本の大学・短大への進学率 57.2%（2009 年）と比較しても圧倒的に高いといえる。だが社会構造や教育構造を見ると韓国と日本は非常によく似ており、大きな差はないように思える。試験に対する公平性、教育意識の高さ、受験に対する親子の一体感など通じ合う部分は多くあり、基礎教育と人間教育の充実を求められる点では日本やほかの国とも変わらない。しかし学歴社会で知られる韓国の「大学受験」に対する意気込みは日本とかなりの差があり、「名門校に入る＝将来が約束される」と考えが根付いているため、大学受験は本人にとっても親にとっても一大事なのだ。そのため受験生は学校以外にも予備校や家庭教師をつけて朝から晩まで勉強し、親は子供の合格を願ってそれぞれの信仰する宗教のお寺や教会へお祈りに行く。さらに日本のセンター試験にあたる大学修学能力試験の日は、遅刻しそうな受験生を見かけたら警察などが試験会場まで送っていき、リスニングの時間は会場付近でのクラクション禁止、また受験生が渋滞に巻き込まれないよう企業の出勤時間を遅らせるなど国をあげての応援体制に入り、世界でも例を見ない光景が広がるという。

そもそもなぜ韓国は極端な学歴社会となったのだろうか。それは歴史が関係している。李氏朝鮮では科挙の合格者や学者が政治権力をも握る高級官僚となり立身出世への関門であったため、その伝統が今日にまで根付いていることが要因であると考えられる。歴史に関して李（2009）は、“私たちは歴史の中に生きており、現在が過去の結果であると同時に未来への種だと思うからこそ歴史を大切にする”と述べている。韓国の過去をさかのぼると、科挙によって官僚になれば地位・名声・権力を得られ、それを元に大きな富を得ることができた。その伝統がかたちを変えて現在にも残っており、ゆえに官僚までとはいかなくとも出身大学によって就職先や出世にも大きく影響すると言われるほど学歴は重要視されている。近年以前も韓国人のエリート志向が強かったということがわかる。



ではなぜ教育においてこのような価値観や上昇志向が一般化したのだろうか。柴田（1985）は人間に対して働きかける行為として政治、裁判、医療、教育、救済をあげて、すべては宗教行為であったと述べており、またマカロバ（1978）はあらゆる宗教は苦しみに置かれている人に善意を施すことで、またその宗教のおきてを忠実に実行しようと努めることが社会福祉の動機になっている、と述べている。そしてウェーバー（1904）によると、カトリック教徒の日雇職人はいつまでも手工業にとどまろうとする傾向が強く比較的親方になることが多いのに対し、プロテスタントの日雇職人は多くの人が工場に流入して熟練労働者や工場の経営事務職人の上層の地位に就こうとする傾向を示しているという。つまりプロテスタントはたえず今の地位にとどまろうとはせず、上の地位を目指そうとする意欲があった。そこで韓国人の教育における上昇志向や価値観も、やはり韓国の宗教人口の半分以上を占めるキリスト教、中でもプロテスタント的な考え方が影響しており、ここまで教育が重要視されるようになったのも教会が関係していたのではないかと考える。本論では教育という分野に焦点を当て、教育が大衆化していく過程におけるプロテスタントの価値観や教育事業との関係性を、社会的分野・文化的側面から見て考察していく。

第１章ではプロテスタントという宗教の特徴と、韓国にどのように根付いていったのかを述べ、第２章では韓国の教育に関して年代ごとに追っていき、社会の動きと教育の変化にどのようなつながりがあるのかを述べる。第３章では韓国の政治家であり第 17 代大統領の李明博の自叙伝『強者は迂回しない』（日本語訳：『李明博自伝』）を元に、教育によって地位を築きあげていくこととプロテスタント的な価値観とどう関わっているのかを探る。

第１章　プロテスタント

1-1　プロテスタントの起源

プロテスタントとは、ローマ・カトリック教会に対する反動的態度を示し、マルチン・ルターによって新しく分離形成されたキリスト教派の一つである。また「プロテスタント」という呼称は、1529 年ドイツのシュパイヤーでの帝国会議で一部の諸都市の諸侯や指導者たちが行ったプロテスト(抗議)に端を発する。彼らは肯定カール五世がルター派の運動を制限しようとしたことにプロテストし、その運動に加わった者たちや、ローマ・カトリッ

ク教会から離れた西方教会ならばどんな教会でも「プロテスタント」と呼ばれるようになった。当時ローマ教皇を中心とした普遍的な考えを持つ伝統的なカトリック教理に対し、ルターは世俗世界や地上的権力に安易に依存する態度は常に批判し続けるべきという対立する考え方を持っていた。彼は聖職位階制度の否定や人間を救うのはキリスト教のみという信仰義認論などを前提とし、民主主義的な組織であるべきだと考えた。ここからルターの宗教改革が始まっていく。結果的にこの前提が教会を妥協に対するより多くの抗議と強制努力へと導くものとなったのだが、しばしば教会を分裂させる原因となってしまった。

1・2　特徴・信条

プロテスタニズムを一言で表すなら「自由の宗教」である。また宗教的な根拠を持った自立、信仰の自由と良心の自由、理性的自己規定、思想信仰、道徳的真剣さ、禁欲的厳格さを兼ね備えるという近代性の能力を持っていた。この能力は世に対する闘いとの傾向もあるが、長期的な視野で見ると厳格な自己訓練に対する宗教的に動機付けられた姿勢であった。安易な道を行かない、自ら責任を負う、良心の決断から結果として招かない孤立をも自分自身に負うこと、これらの言葉で神の律法を内面化し「心」の中にある律法を把握する。そして強制的な態度、自分や他者に対する冷酷な態度、道徳的幻覚的な態度は反快楽主義的な生活態度に結びつくことがプロテスタント的な態度を映し出している、とプロテスタントの倫理神学者と哲学者は独自の解釈学を叙述している。すなわちこの能力はプロテスタントの職業に対する忠実さとも言える。

また、漠然と日々を過ごすのではなく時間厳守を美徳とし、神によって与えられた人生の時間を有意義に用いるよう努めた。「職業」に及ぼす積極的な作用から「余暇」さえも休養、自分を省みる時間、回復の機会として定義し、欲望を抑制する姿勢を習慣化して身につけることで仕事と娯楽の区別をなくしたのである。このことから彼らは休日を無為に過ごすことに慣れておらず、怠慢に陥ることもわずかとなった。それゆえ誠実に、また正直に生きようと努める。そのことが努力、禁欲、自己規律を促進することにつながっていった。成功を収める思想、業績を上げるために意欲的に活動すること、昇進を求める姿勢は市民の環境の中にも大きな影響を与え、その後能力主義による貴族政治的プロテスタニズムが発展した。

1・3　職業に対する勤勉さ

プロテスタントの特徴である「禁欲」についてもう少し取り上げてみる。ジャン・カルヴァンによって提唱された「予定説」では、神の救済に与る者と、滅びに至る者があらかじめ決められているとされている。これにより「救い」と「亡び」をめぐり、「確信」と「絶望」の中間として誰一人助けてくれないという「不安」な心理が生まれた。だが自分が神に選ばれし者なのかがわからない、そのやりきれない孤独や不安におそわれた彼らは自分の救いを確認すべく動きだした。それが職業に没頭することだったのである。生活の全体を神につかえることで救いの確証を得ようとすべてのエネルギーを注ぐ、それこそ彼らの典型的な世俗内的禁欲の生活スタイルであった。

では具体的に「神にほめられる生き方」を追求する点で何をしたかというと、自分の人生という「材料」を用い、生涯をかけてより禁欲的な生き方を形成することで、自分は救いに予定されたものであるとのしるしを得ようとした。そう生きることができれば、道をふみはずすことなく合理的に生涯を貫くことができると信じていたのだ。しかしいくら能動的禁欲でも行きあたりばっかりでは確証を得ることにつながらず、毎日の積み重ねとしての生き方＝方法による生の形成が必要とされた。そして求められたのは、個々の善き行為ではなく組織にまで高められた聖潔な生活だった。そこで具体的に実践するにはどうすればよいのかと考えたとき「職業労働」に没頭したのだ。その職業に打ち込むことで同時にキリスト教的な隣人愛を実践し、まじめに職業人としての自分を形成していくこととしたのである。(安藤、1977：124) こうして世俗的職業労働への献身は、不安の解消作用の域を超えて「自己確信」のかたまりのような職業人をもつくり出した。

1・4　隣人愛

カルヴァニズムの思想の下では、キリスト教古来の「隣人愛」の精神が独特の色彩をおび、そこに独特の職業観と職業倫理が形成された、という消息が決定的な影響と意味を持った。

あの不安をともなう神との孤独な関係は人間関係から個人を引き離し、それにより人情のしがらみにとらわれることもなくなり、個人の解放をもたらした。しがらみから最も自由になれるのは、自分が直接絶対者との垂直な関係に立脚して生きているとの自覚を持つ精神であるという。そうした自己定位を持たない限り、世間の風圧から自由になることは

できない。これが「主体性」を徹底してつくり出す一つの精神形式だった。

また神が欲しがるのは、人間社会が神の戒め（キリスト教的自然法）に従って社会的な仕事に励み合理的に編成されることとされた。その中で隣人愛の精神は、具体的な誰かに対して奉仕することが必ずしも神の意志に沿うものではなく、全体としての社会が再編成されていくこと、ビジネスライクな社会的分業の形成や、合理的秩序の形成こそ隣人愛の真の実践と考えられた。この社会倫理についてウェーバーは「隣人愛の非人間性」と呼んだ。隣人愛の実践の指標とは、①道徳的に良いとみなされる職業、②それの生産する「財」の社会全体に対する重要性、③収益性の三つであった。もし収益性のないような職業なら全体の社会に有用でない証拠であり、神の栄光を増すものではないと考えられたからだ。この考えから、やがて資本主義の精神へと変化してゆく萌芽がみてとれる。

予定説からは不安の心理を経由した「行動的禁欲」の高いエネルギーが生じ、「隣人愛の非人間性」からは合理的社会の形成を目指す経済倫理が生じた。これらが結合し「職業労働観」を形成していった。確証に燃え自己確信のかたまりとなったピューリタン産業人は、隣人愛を実践すべく収益性の追求に打ち込んだことで、自分をコントロールする自己経営の方法性をもって職場を経営する優れた経営人となった。(安藤、1977：127-136)

1-5　韓国への参入

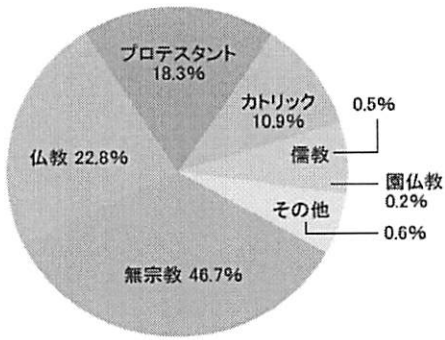
14 世紀末、太祖・李成桂によって建国された朝鮮王朝が支配理念としていたものは儒教、なかでも朱子学が主流だった。ところが 16 世紀から 17 世紀にかけて、南からは日本が侵略（壬申の乱）、北からは清が侵略（丙子の胡乱）と相次ぐ侵略戦争に対し無力だったことをきっかけに儒教は下り坂をたどっていく。これを改善すべく儒教的秩序を強化に励んでいたが、権力から疎外された在野の士班は時代の変遷を直視し、改革をもたらすべく新しい理念を求めていた。それにこたえて中国から伝わってきたのが西学であり、天主教すなわち「西教」と呼ばれるカトリックだった。また、これとは別に西教を新しい宗教理念として受け入れようとした少壮学者グループがいた。1770 年ごろから天主教の教理に関する研究会を開いていた彼らは、仲間の一人で北京に赴く李承薫に、北京の教会を訪れて多くの資料を求めることと洗礼を受けるように勧めた。こうして 1784 年、李は受洗して最初のカトリック信者になって帰国し、同僚たちに洗礼を施すことで朝鮮天主教会の礎石となったが、その後度重なる迫害にあってその信仰も来世指向的なものになってしまう。(柳、

1987：23-26）

19 世紀における朝鮮の宗教は伝統的な儒教と仏教、東学の二つの類型に分けられる。しかし東学は革命運動を起こすほどに成長していたため政府によって弾圧されてしまい、このような状況の中に第三の新しい宗教として登場したのがプロテスタニズムであった。

プロテスタニズムの受容は 3 つの経路によってなされた。第一に、海外にいた朝鮮人がプロテスタントの宣教師と交渉して聖書をハングルに翻訳したこと。商人として満州に出入りしていた徐相崙らは、そこにいたスコットランドの宣教師ジョン・ロスらとの接触を通してクリスチャンになると同時に、宣教師と協力して『新約聖書』を翻訳するようになった。これは戦況の基礎作業であり文化的アプローチの試みでもあった。徐はこの聖書を販売しながら伝道に励み、ついには故郷である黄海道の松川に最初のプロテスタント教会を建てた。第二に 1884 年の甲申政変に失敗して外国に亡命した若いエリートたちがのちにプロテスタントの信者となって帰国したこと。彼らは YMCA 運動や教育活動を通してキリスト教的ヒューマニズムに基づく民族運動と宣教を続けていた。第三はアメリカの宣教師一行が来韓したことに始まる。1985 年から 1908 年にかけて宣教師が続々と訪れ、魅力的な宣教を繰り広げることによって朝鮮にプロテスタントの一大ブームを巻き起こした。（同上、44-46）

2005 年の韓国統計庁の人口住宅総調査によると、韓国の宗教人口は 53.1%と約半分を占めており、内訳として仏教が 22.8%、プロテスタントが 18.3%、カトリックが 10.9%、儒教 0.2%という結果が出ている。いまやプロテスタントは仏教についで第 2 位の宗教にまで発展していることがわかる。



1・6　宗教文化の展開

朝鮮の宗教文化史は仏教と儒教とキリスト教が交替して展開され、各宗教は導入されては盛衰する循環的円を描いて進んだ。新しく導入された宗教は初期数世紀の間、その宗教の持っている文化創造のエネルギーが活発に発動され、多くの成果をおさめることで、宗教団体そのものが成長し社会体制から公認されるようになるが、さらに進んで支配階級に属する特権を享受するようになると、今度は自己の所有と特権を保護し維持する欲望から、

現実と癒着してしまう。すると現実的な利害関係と密着していて宗教としての創造的生命力を失い、調和を大事にする精神を失った宗教は民衆から捨てられ衰退の道を歩むことになる。宗教にはその本質からして一つの性格がより支配的に現われる。仏教は縁起法を中心とした包越的な理念が強く支配し、儒教は文化的価値を生み出す社会的存在にその強調点が置かれている。これに対しキリスト教は霊的超越と歴史的現実との調和を強調する理念が支配的であると理解できる。こうしてキリスト教は韓国に受け入れられ定着していった。三つの宗教が循環螺旋を描いて展開されてきた宗教文化史は韓的霊性の自己展開の歴史であり、朝鮮人が夢見た「人間らしい生」の形成過程であったということができる。(柳、1987：13-17)

1・7　韓国のキリスト教の特徴

韓国が民族の受難と社会的混乱の連続である中、キリスト教、特にプロテスタントは一途に驚くべき成長を成し遂げてきた。導入されてから 100 年にしてクリスチャンの数は全人口の約五分の一を占めており、1500 年の民族と共に生きてきた仏教や儒教をしのいで現代の文化形成の表面に躍り出ている。世界の教会史においてもまれな成長を遂げたが、その要因を三つに分けて考察する。

第一に社会的変動とかかわる教会外的な要因である。日本の植民地になった 1910 年にはクリスチャンの数が約三倍になり、朝鮮戦争が起こった 1957 年にはさらに約三倍と増えた。全国の人民が安定を失っていたときに教会の復興が起こり、みな神に依存すべく教会に集まってきたのだ。民衆は教会共同体に所属することによって安定を求めたと理解される。第二に韓国特有の宣教活動と信仰形態があげられる。民主主義を目指して社会が変化していく中で儒教・仏教が保守的な態度や無関心な態度を表しているとき、キリスト教は積極的な支援を与えてきた。プロテスタントの原理ともいえる「自由と平等と自律」の思想は、民主主義的な共同体を基礎づけるものであった。そして文化の開化に貢献した宣教活動では文化的かつ社会的な開化を迫られる中で、プロテスタントはその当初から現代的な教育・医療・文書事業を通してこれに応え、社会事業に貢献していた。韓国において封建制度が近代社会へ転換する過程の中でプロテスタントが導入され、彼らの影響によって多くの人がキリスト教信者になった。つまり彼ら宣教師のこうした活動が社会事業の礎を築いたといえる。第三はキリスト教をたやすく受容した民族的霊性である。我々に内在

する神、すなわち聖霊によって霊的な救いが得られると同時に、この世における祝福が得られるものと信じる。これは超越的な部分と内在的な部分の結合として理解され、こうした超越性に位置付けられた現実的生こそ民族的ビジョンの実現として受け入れられるものだった。(同上：175-178)

第２章　韓国の教育政策

ここまでに述べたように、プロテスタントは神に認められるべく職業に没頭し、上の地位に就こうとする傾向がある。韓国社会において、有田（2006）は、個人の努力と能力によって達成される「学歴」の高さが，その後の所得や職業的地位などでの社会的成功をもたらすはずだ、というメリトクラシー的社会観が韓国社会の自己イメージと相即していると指摘する。そんな学歴を作り出す韓国の教育政策は社会的経済状況と関連し、時代とともに変化した。以下その変遷を時系列に沿って概説しようと思う。

２・１　1940 年代～1950 年代

第二次世界大戦が終わり日本の統治から解放された朝鮮半島は、教育の民主化と機会均等の理念を推進していく方針を示す。しかし植民地時代に多数が教育を受けられず韓国人の 80%が文盲であったことから識字教育が最優先とされた。この識字教育に焦点を当てた社会教育は公民としての資質を向上させ、自立経済を確立させることを目的として行われた。また 1946 年には就学機会に恵まれず上級学校に進学できなかった人々を対象に公民学校が設立され、一般大衆向けの政策の展開を図った。そして朝鮮戦争が終戦したのち、保留となっていた「6 年間計画」により義務教育が完成し適齢児童の 96%が国民学校（小学校）に就学するまでになる。

1950 年代に入り、教育が生活向上を図る重要な手段であるとの認識があった民衆は識字教育に高い関心を示した。普通教育が普及していく中で国民には「学ばなければ生きられない」という考えが根付いており教育熱が高かったこと、また韓国語での教育を継続的に受けられることが合わさって、教育に対する欲求を爆発させたともいえる。当時の政策は識字教育、国民啓蒙教育、職業技術教育、学校教育を補完する学校教育、教養教育の五つ

の項目があり、中でも日常生活に必要な読み書きや算数の能力を養う識字教育と、地域住民への国文普及を目指した国民啓蒙教育が重視され、基礎能力の開発に力が注がれた。これらを通じ民主主義理念を韓国国民に普及させた。しかし深刻な貧困状況を克服するための国民の自立や経済発展に対する政策は発動されず、自立促進のための社会教育政策の基盤は不十分であった。(尹、2010：69-78)

2・2　1960年～1970年代

朝鮮戦争後の復興と経済再建の目標を抱えた韓国は、急速な工業化・産業化により高い教育力を持った労働力の確保が課題とされた。この時期から産業に貢献可能な人間形成が必要とされるようになり、特に科学技術界の人材教育が要求されたことで職業技術教育も積極的に支援した。さらに政府は国民啓蒙教育の一環として 1950 年代の識字教育の成果を土台に成人学校、公民学校、地域文庫普及などの活動を通して経済発展と関連する知識を習得させた。このように時代の要請に適した人材育成および国家観の形成がなされたといえる。また教育熱が増したことで 1962 年代半ばから学生人口の増加し入試競争の過熱化が始まることとなる。(尹、2010：84-85.93)

1970年代になると産業化推進の結果として農村経済の停滞と都市・農村間の所得格差へとつながり、高度経済成長によって生まれた構造的な問題から労働者の権利・賃金の要望が高まって社会的葛藤が深刻化していった。したがって生活改善と所得増大のための地域社会開発の実現が国家の目標とされる。そこで行われた「勤勉・自助・協同」の基本精神に基づくセマウル運動は貧困の悪循環の中にあった農村に意識改革の転換をもたらし、その後国民意識啓蒙教育として普及した。これにより社会教育を国民の義務とし経済発展が促される。職業技術教育の推進も引きつづき行われ、公共職業訓練所や放送通信大学の設置や技術学校に特別学級を新設するなど技術系人材を育成する機会を拡充した。(同上：103-104)

2・3　1980年代

1980年代の社会教育制度の特徴として顕著なのは、高度経済成長を反映して生活の質を向上させる教育、また余暇と文化教養的生活を営むための新しい知識と技術を習得する学

習への教育的関心が高まったことだ。

まず 1970 年代に導入された通信教育が普及し、放送通信大学は教育の質的向上のために教育課程の改編による学科の増設、教育媒体の開発、地域学習施設の拡充など環境改善に注力したことで規模が拡大した。その結果通信教育の短所である対面学習の欠如を補完する教育環境を整え、専門課程の多様化によって多くの受講者を確保し高等教育機会の拡大にも成功する。そして放送通信高等学校では経済環境や個人の事情により一般高等学校への進学がかなわなかった人々に対して高等学校教育課程を受ける機会を提供し、経費の半分を国家が負担したり奨学金制度を拡充するなど経済的に恵まれない人に対する費用面での支援も行われたことで、進学率も上昇の一途をたどっていく。

そしてもう一つ、韓国では企業の事業拡大によって人的資源の確保が経営課題として浮上し、企業側の需要に基づく職業教育が推進されるようになり、また職場労働者の間では自らリカレント教育を受けることで企業側の求める能力向上と賃金アップを図ろうという自己啓発の動きが現れ始め、両者の要望に基づき「開放大学制度」が導入される。この開放大学は生涯教育の精神と教育の大衆化という時代の要求に応じ、低学歴者や中退者に対する教育の機会を拡大し、また職場労働者の再教育を通じて知識力と技術力の両面から産業社会に能動的に対応するという趣旨のもと設置された。さらに経済の安定化に伴い、生活の質を向上させようという要求が文化・教養関連の社会教育政策の展開されていく。その一環として設立された大学付設生涯教育院では、趣味や政治経済を含む社会的関心ごとから日常生活に必要な知識、一般教養に至るまで多種多様な講座が開かれた。この政策の特徴は①社会教育への女性の参加促進、②大学の社会的奉仕の役割、③市民からの学習機会の積極的活用の三点に要約される。それまでは韓国の大学が社会的エリートを養成する教育機関としての役割を担っていたことから、学問研究の場として地域から独立した存在という認識が強かったのだが、大学における教育機会の拡大と地域貢献に対する認識が向上するにつれて既存の大学の教養課程の教科と大学特性を生かした講座が開設され、地域社会に対する奉仕の役割を果たすようになった。また経済成長に伴い市民の所得が増加する中で、自ら積極的に学習内容を選択し個人で教育費を払い学習したのである。

こうして大学にとっては社会奉仕的機能の拡大、国民にとっては学習欲求の充足という双方が享受できる利益があったために教育は急速に発展した。このような市民の教育活動への参加を見ると、学習に対する自発的かつ能動的性格が内在していたことがわかる。(尹、2010：153-162)

2・4　1990年代

1993年、教育大統領候補と自負していた金永三は、社会改革の推進に伴い、開かれた学習社会と生涯学習社会を建設する教育改革を主張する。そこでは一番に学習者の「自己負担と自由な選択」を重視する教育が推進された。学習者を中心に考えられた多様な教育プログラムで自己実現を最大化し、すべての人にその機会が与えられる、そして時間と空間の制約を克服するといった質の高い教育を追求することで、サービス中心の教育を構築していった。こうして質・量ともに発展し、ようやく大学が地域住民の学習施設として開放されるようになる。(尹、2010：165-166) 他にも①学業不振の学生向けの補習をはじめとする私設学院を中心とした取り組み②独自の教育専門ケーブルテレビ放送局の開局による遠隔媒体を活用した取り組み③六つの課程で30～60代の自己啓発を促す高等教育機関における取り組み④自己啓発教育を支援する取り組みが行われ、主に文化教養の教育がなされた。日本の植民地統治からの解放以降、大学教育の急速な拡大にも関わらず韓国国民の教育熱と大学教育を通した社会的地位の向上の欲求はますます高まり続け、大学の定員不足により毎年約80万人の受験生の中で4分の3が進学できないという熾烈な競争状況にまで陥る。そこで1990年には自己啓発教育の支援で、高校卒業後に大学教育を受けられなかった人々が何らかの教育機関で学習したのち、国家機関の実施する試験を受けて学士号を取得することも可能になる「独学による学位取得に関する法律」が制定・公布される。(同上：181-185)

グローバル化による経済成長に伴い生活が豊かになる中、今度は労働市場に必要な人材として社会変化に適応可能な知識を継続的に学ぶため、教育の質的価値を重視する学習者が出現した。そうして豊かになった生活状況を担保として教育費を自己負担で賄い、より豊かな生活を実現するために積極的に学習活動に参加するようになったのだ。質のよい学習を継続的に行うことでさらに学習に対する認識と欲求が高まるようになっていく。そんな中、韓国は1997年のアジア通貨危機による経済危機に直面する。これにより企業は大規模リストラによる構造の転換を図ることとなり失業者が急増したために早期退職の流れが形成され始め、彼らは対策として教育費を自己負担し労働市場に適応可能な能力を身につけるための自己啓発を求められる状況になった。しかし裏では社会的には経済的格差が現れはじめ、学習費を賄うことが困難な人々もいた。なぜなら平等な教育内容・教育機会の提供を重視する政策の理念よりも、1990年代に定着した学習者の自己負担と自由な選択を重視する生涯教育政策が、アジア通貨危機直後の「国民政府」の基本方針と合致したか

らだ。これにより疎外階層の教育機会の不平等が進んでしまう。さらにアジア通貨危機以降、韓国社会において国民の所得格差が拡大される過程で、学習は自己負担で行うため生涯学習においても所得の差異による教育機会の格差がみられるようになった。

もう一つの変化は、軍事色の強い中央集権的行政運営からの脱皮によって起こった「地方分権化政策」だ。この地方自治体の生涯教育政策は地域の発展を担う人的資源の確保・開発が目的とされており、失業者のための再雇用教育、外国人のための異文化教育、国際化における外国語教育、女性の自立と生活支援のための教育などが行われた。しかしこれも学習者の自主的参加と負担を促す理念の普及に焦点があてられていたため所得の有無による格差は生まれ、この政策を推進しない自治体はさらに格差が広がっていった。(同上：216-217) こうして 1980 年代に始まり 1990 年代以降本格的に推進された生涯教育政策では、行政主導の画一的生涯教育の推進という課題を克服し学習者の自由を獲得する成果をあげることはできたが、アジア通貨危機を前後としてすべての人々に平等な教育内容・教育機会は保証できず二極化が進み、教育機会の格差が拡大する結果となったことがわかる。

以上のように、アジア通貨危機は教育に対する考え方を大きく変えた。高賃金を得るためには高学歴であることが求められ、高学歴であるためには質の良い教育が必要という認識されはじめた。知識の習得のため意欲的に取り組んでいた「教育」がいつしか学歴稼ぎの手段となっていき、学校と職業を結ぶ媒体へと変化していったともいえる。だがその一方で「自由な選択と自己責任」という響きのよい言葉の裏には、所得のある限られた人を対象にした教育であるといった意味も含まれており、教育を受けたくても受けられない人が存在したということも忘れてはいけない。こうして学歴社会や社会階層差が助長され学校教育や課外教育への投資が増加したことは、今日の韓国まで続く二極化へとつながり、現在も最も深刻な社会問題の一つとして認識されている。

第３章　李明博を通して見るプロテスタント精神

ここで注意すべき点は、教育が大衆化していったのは社会的・経済的状況だけが要因ではないということだ。

1880年代の朝鮮政府は教育と医療に関する政策が少なかったため、その代りにプロテスタント宣教師の役割が大きくなり、朝鮮の様々な分野の開化に先導的な役割を担うようになる。教会によって近代的な学校が建てられはじめたことで宣教活動が行われ、自由・平等・博愛などの実践を主張するプロテスタントの思想が広がっていく。また、当時男尊女卑の考えが偏在していたため貴族層以外の女性が学習に参加することは難しかったため、最初に学生として集まった女性は孤児・寡・妾など疎外された階層であったといわれている。長い儒教の影響により人間関係は職業・性・年齢などの序列があったものが、プロテスタントが社会事業に介入しはじめたことで本格的に個人的、社会的平等が重視されるようになった。プロテスタント的思想が浸透したことで、身分階級の打破および万人平等思想という国民啓蒙意識の形成、そして教育の大衆化にも重要な役割を負ったといえる。(李、2010)

このように1900年代に教育の必要性が見直されるずっと前からプロテスタントは韓国の教育に事業に介入しており、その思想は昔から植えつけられていたとも考えることができる。ここからは李明博の半生を通し、地位を築きあげていくまでの過程でプロテスタント的な価値観がどのように関わっているのかを探る。

3・1　幼少期

李明博は1941年に三男四女の三男（第五子）として生まれる。父親の仕事の関係で日本に生まれ、終戦直後の1945年に父親の故郷である浦項へ引き揚げたのだが、生活は決して楽ではなかった。小学校低学年から父について仕事を始め、高学年に入るとマッチ棒に硫黄をつけて売ったり、軍部隊の鉄条網の外で海苔巻きを売ったりとあらゆる仕事をやり始めた。そのうち欠食は日常化していき中学三年生のときに四ヶ月も寝込むことになる。

明博の母・蔡太元の実家はキリスト教の信仰が厚かった。母は毎朝お祈りをする際、まず国や社会のこと、親戚一族、近所の人たちの幸福を願った後ようやく子供たちの名前を出し、自分自身のためには一言のお祈りもしない。一家の暮らしが苦しくても、いつも他人に対する祈りが先であった。そして一番厳しく教えられたのが、近所の人たちに奉仕してもいかなる対価も望んではいけないということだった。たとえ水一杯でももらってはいけないという言いつけを守っていると近所の人たちは生意気なやつだと不満気だったが、しだいにきちんと仕事をするまじめな姿に「明博の家はどこか違う。貧しくても自尊心は

たいした子供たちだ」と言うようになった。明博の中でも手伝うという行為は堂々として潔いものになり、貧しさを克服できる力が知らず知らずのうちに育っていく。それは母が身をもって実践し見せてくれた力であった。

このように母のキリスト信仰に基づく家庭教育により幼少期から理性的自己規定、道徳的真剣さ、隣人愛といったプロテスタント的な態度を学び、以後の明博が形成されていったと言える。

3・2　高校生

この当時、高等学校への入学は限られた少数の特権であり、大家族の場合下の兄弟たちは兄の教育費を賄うために自分の進学は諦めるのが普通であった。明博も諦めていたが、中学の担任教師が「全体の首席で入学した生徒は授業料が免除される」と母親を説得し、授業料が免除される間だけという約束で定時制の同志商業高等学校へ進学することとなる。入学後も学校に通いながら昼は母の仕事を手伝い、季節によって飴売りなどをしながら全身汗だくになって働いた。そして授業料が免除される間だけという条件で入学した高校を、三年間ずっと昼夜間の全生徒中トップを貫き無事卒業する。

高校卒業後「金がなくて中退したとしても高卒よりは大学中退のほうがまし」と大学受験を決意し、朝夕は市場で家業を手伝いながら受験勉強をする。自分が三年間で学んだ知識がいかに取るにたらないものかを思い知り、必死の思いで勉強に励んだ結果合格。1961年、肉体労働のアルバイトで貯めた学費で高麗大学校商学部経営学科に進学した。

この頃に普通教育が義務化され国民の教育に対する熱も高まったが、明博も例外ではなかったはずだ。なぜならまだ貧困状況を克服するための政策は発動されておらず、ずっと貧しく苦労してきたため自分で「学ばなければ生きられない」ということを実感していたからだ。休むまもなく働き家を助け、さらに勉強も怠らなかった勤勉な姿は、幼少期に母から教わった力を発揮したといえるだろう。

3・3　大学生

大学に入っても生活はあまり変わらず、明け方に起きて仕事をしてから昼は大学に通い、家に帰るとまた手伝いという生活を繰り返していた。それが学費の収入源だったからだ。

学費と生計のために駆けずり回りその日その日と闘う生活だったが、大学に行くことはどんどん視野を広げてくれ、自分の現実問題から外の問題へと関心を変えていった。そして明博が三年生のとき、内向的な性格を変えようと思い切って学部の学生会長選挙に出馬する。周りの友達には納得されなかったが、明博の中では当選してもしなくてもこの選挙には意味があり、一人の世界を抜け出す人生の転換点だという覚悟で挑んだ。その結果僅少差で当選し、翌年には総学生会長代行となる。

その頃世の中は朴正熙政権の強圧的な政治のために大学内部で民主化運動が活発に行われており、明博は日韓基本条約締結に向けての日韓会談に対して約一万二千人参加のデモを主導し指名手配される。しかし何も悪いことをしていないので堂々と市警に向かったが、国家内乱扇動の容疑で逮捕され最高裁で懲役三年・執行猶予五年の判決を受ける。監獄の中では今までになかった「余裕」を持つことができたため、先延ばしにしていた勉強に没頭し、専攻以外の本も読み考えを深めたり、自分より下の囚人たちを見てこれまでの絶望を貴重な財産と考え楽観主義を得ることもできた。そして一度だけ面会に来た母が言った「信じていることに従って生きろ」という言葉を胸に深く刻みつける。大学に通ったことで学べたことや経験した様々な出来事は、これからの明博の人生を変える転換点であった。

3・4　現代建設入社

大学を卒業しいくつかの会社の入社試験を受けたものの、前科があった明博は見えない国家の手によって進路を塞がれていた。そんなとき目に入ったのが現代建設という会社の「海外の建設現場に出る働き手募集」の広告だった。当時海外にいけるのはごく少数の限られた階層に限定されていたこと、また韓国に居場所がなかったことから迷わず応募する。しかし筆記試験後に呼ばれた面談ではやはり前科が邪魔をしたため、朴正熙大統領に向けて入社妨害に対する抗議の手紙を書き、「一個人が自分の力で生きていこうという道を国家が塞いだなら、国家はその個人の永遠の負債を負うことになる」と投げかけた。その言葉が響いたこともあり、紆余曲折の末面接を受けて 1965 年入社が決まる。しかし入ってみるとそこは組織が官僚化した奇妙な現象が起こっており、その風潮は社会全般にも広がっていった。明博はこれに違和感を抱き、会社や組織の存在理由を考え、官僚化が引き起こす組織の硬直性や非効率性に対する意見を集め上に報告すると要注意人物という烙印を押されてしまったが、指弾されなければならないことはまったくなかった。公式的に叱責し

てくる人はいなかったのが何よりの証拠である。

自分のことは自分で責任を負う。このことは人として当たり前ともいえるが、自分が過去にやったことが社会にどう解釈されているのかを受け止めた上で、次へ進むためにアクションを起こし自分で道を切り開いていくところがいかにも明博らしい。たった一人でも国を相手に動けたのは、自分が生きていくためには働かなければならないし、貧しさは克服できることをわかっているからこそできたことだろう。そして入社後の官僚化に関する動きだが、ここにプロテスタント的精神が二つ隠されていると考える。第一に組織化の反対だ。民主主義であるプロテスタントは組織による権力に批判的な態度を取っている。退勤時間が過ぎても上司の目の色をうかがって席に座っているような会社の状況に違和感を抱き、仕事をきちんとこなしているのだからみな平等であるべきだと改善を試みた。第二に隣人愛があげられる。隣人愛は全体としての社会が再編されていくことや合理的秩序の形成こそ真の実践と考えられている。「組織の官僚化いう風潮は一般化されてしまっているがこのような不満を抱えているのはきっと自分だけではない」とアンケートを実施したところ、やはり改善すべきだという意見が圧倒的であった。監獄の中で母に言われた「信じていることに従って生きろ」という言葉を胸に、社員全員が働きやすい環境を作るため、また自分をきっかけに社会を変えようとしたことがみてわかる。

3・5　スピード昇進

入社して5か月後、タイの高速道路事業という韓国の建設史上初の海外事業に末端経理担当として関わる。だが技術者がいないため意欲だけで走ろうとする工事は計画通りには進まず、つまずくことが多かった。着工してから一年半たった頃、現場に来ていた鄭社長に「経理担当としてこの工事はおおよその見当でみても損をしているのは明らか」と訴えたが、勘違いだといって流されてしまう。しかし明博は自分の予測は間違っていないと思い、資料をかき集め問題の分析までつけて上司に報告し、機会があるたびに損失額を取り上げた。だがその資料は部長があたかも自分が作成したかのようにして社長に報告しており、社長は誰かが工事代金を着服したと推測し、素早く飛んできて調査が始まる。部長と課長はお互いに責任を逃れようと他人のせいにし、明博は個人の着服はしておらず技術と経験不足から引き起こされたものだと述べた。その結果二人は平社員ほどでもない悪い奴らだと判断され、明博が責任者に命じられる。だが平社員が社員を指揮するのは無理があ

るという理由で、入社して二年足らずで係長に昇進した。その後タイの工事で被った損害をバンコクの建設現場で挽回して帰国すると、今度は西氷庫の現代建設重機事業所の管理課長に発令される。そこは大卒職員が行くほどの場所ではなかったが、自分がそこに異動になったのは何か意図があるはずだと前向きにとらえ、今までの業務を改めることから始めた。

ここでのポイントは二つある。一つ目は寝る間も惜しんで仕事をするほど熱心だったことだ。プロテスタントは人生の時間を有意義に用いるよう努める。重機事業所では出社時間を一時間早め、土曜の午後でも規律が緩むようなことはさせず、休憩時間に遊ぶことも禁止するという徹底ぶりだった。また幼いころからお祈りのための四時起きが身についており、早朝だけが唯一の自分の時間であったので、読書や英語の勉強は早朝にやった。すべてのエネルギーを仕事に注ぎ没頭している点では、カルヴァンの予定説が示す、神の救済を確認すべく生活全体を神に仕える世俗内的禁欲の生活スタイルとも当てはまっている。二つ目は仕事を掌握すること。自分の仕事を自分の手で把握するため、一度すぐに修理して現場に送らなければならないブルドーザーを解体したことがあった。自分で一から組み立てなおすことで構造や性能、部品一つ一つの名前と機能がはっきりとわかるようになり、ほとんど知らなかった重機の装備に対して自信をつけた。真面目すぎるほど意欲的に取り組む姿は幼少期から変わっていない。

明博の昇進命令はいつも急で、気が付くと次長、部長、理事、常務、専務、副社長と昇進していた。課長の時には次長並みの仕事、次長の時は部長並みの仕事をこなしていたが、職位や職責は仕事をするために必要だから与えられたものだと考えており昇進のために努力していたわけではない。昇進は一歩ずつ着実に、そして誠実に取り組み続ける姿勢が評価された結果である。

3・6　社長就任

韓国の建設業界の中東進出ブームが起こった 1974 年、すべてを中東に頼ることに賛否両論があった。アラブ修理造船所建設工事をめぐり対立した海外担当社長と国内担当社長が辞任し、明博がグループの未来を託されることとなる。能力と信頼だけで世の中のことをすべてやれるわけではないと本気で固辞したが、目の前に迫った運命から逃げまいと決心する。国際化の時代を迎え、高度の専門性と組織力が企業発展を主導する時代になった

からこそ、専門経営者を起用することで体質改善しようとしたのだと自分なりに解釈した。社長になって以来、暴風の吹き荒れる政治情勢と向き合わなければならなくなり、幾度も権力闘争の突風に呑みこまれるが、明博らしさで一つずつ乗り越えていく。

明博は毎年新入社員が入るたびに言っていることがある。それは物事に対し常に肯定的で積極的な挑戦意識を持たなければならないということ。100%失敗することがわかっていることでもやった人には経験が残るが、初めから放棄した人には何も残らない。やるかやらないかは 50：0 の違いがある、だからこそチャレンジ精神が大事なのだと。そしてもう一つは自分の適性を目の前の仕事に合わせること。この世の中一人一人にあった仕事など用意されていない。その落差を埋めようとしたり相手が変わることを望むよりも自分が変わるほうがはるかに効率が良い。変えられるのは自分しかいないのだ。これはきっと明博自身が最も心がけていることであり、困難に立ち向かうたびに言い聞かせていたことだろう。また、仕事をするときは企業主よりはるかに高い目標を提示し、その達成に最善を尽くした。常に期待の一歩先を行き、赤字を出さないように管理するよう言われると黒字が出る新しい目標を提示しそれを達成する。それによって発生する利益はすべて企業主のものであり、明博に残るのは達成感だけである。その達成感を得るために働いた。相手への見返りを求めるわけでなく自分のために働く、それは幼いころに母から学んだことそのものであり、さらに成功を収めようとする上昇志向の精神はプロテスタント的な思想といえる。

ここまでの明博の半生を通して見えたプロテスタントの特徴として、①上昇志向、②隣人愛の精神、③時間に対する厳しさの大きく三つを見ることができた。聖書に書かれている通り、キリスト教は神に仕える心を持って神を愛し、またこの世で私たちと一緒に住んでいる隣人を愛して奉仕する実践的な宗教である。明博はいつも自分の想いに正直に、そしてまっすぐに生きており、自分の損得よりいつも家族のため・社員のため・会社のため・国のためを想って行動していたし、その仕事ぶりは寝る間も惜しんで働くほど熱心かつ誠実であった。また、初めから高い地位に就くために教育を受けたのではなく、ただひたすら目の前の仕事に一生懸命打ち込んでいた結果として昇進につながった。天職に励むことで神の恩寵を得ることが第一の目的で、財産は結果的に後からついてくるものという点ではプロテスタント的な世俗内的禁欲の生活スタイルそのものである。その根底には幼いころのプロテスタント信仰だった母の教えがあり、知らず知らずのうちに根付いた宗教的価

値観が明博を突き動かしていたといっていいだろう。

おわりに

今日まで続く韓国の学歴社会の転機となったのはアジア通貨危機だといえる。第二次世界大戦後はまだ識字率が低く教育を受けることができない人がほとんどだったため、公民としての資質向上のため義務教育を課し学ばせたが、次第に学習者の意欲が高まっていき、様々な立場の人が幅広い分野の教育を受けられるようになっていった。だがアジア通貨危機による経済的ダメージを受けたときに、生き残れるのは知識や能力のある人、つまり「会社に必要とされ高賃金を手に入れられるのは高学歴の人」という認識が広まり、質の高い教育が求められたことが学歴社会を助長した。そんな教育の基礎を築き重要性を訴えたのがプロテスタントであり、この学歴社会に生きる上で欠かせない上昇志向もプロテスタントの特徴の一つだ。しかし、このプロテスタント教会が主導して行われた教育により万人平等の国民啓蒙意識が形成されたと同時に、プロテスタントの特徴でもある上昇志向も植えつけられたために競争心が生まれ、その結果「学歴社会」という格差をもたらすまったく反対の社会現象をも引き起こしてしまった。だがプロテスタントによる教育はマイナス方向にばかり傾いたわけではない。明博が大学生だった 1960 年代の韓国はまだまだ識字率が低く、大学に進学できる人はほんの一握りだった時代に猛勉強の末合格し、入社後も若くして社長までのぼりつめ、その後も国会議員、ソウル市長、大統領と務めたことで人々から「神話の主人公」と呼ばれた。この神話がひとつのサクセスストーリーとなり、たとえ貧しくても自助努力で高い地位につけることを示す例となったとも考えられる。第２章でみたように、教育における上昇志向はその時代の社会的な影響を受けて加熱していったが、明博の半生を見ると少なからずプロテスタント的要素も加わっていると言えるだろう。

近年では企業の需要に対して大卒者が多すぎるため、高学歴層も就職できずに「学歴難民」と呼ばれる人ガ増えているが、ただただ大学に進学し高学歴を手に入れても、そのあとの先のことをしっかり考えなければ意味がない。韓国に根付いた上昇志向を育んだプロテスタント的要素が、これからの韓国社会全体の発展にどのように関わるのか注目すべきであろう。

参考・引用文献

F.W.グラーフ；野崎卓道訳（2008）『プロテスタンティズム その歴史と現状』教文館

S.F.ブラウン；五郎丸仁美訳（2003）『プロテスタント』青士社

柳東植（1987）『韓国のキリスト教』東京大学出版会

安藤英治（1977）『ウェーバープロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』

浅見雅一，安廷苑（2012）『韓国とキリスト教　いかにして"国家的宗教"になりえたか』中公新書

李明博；平井久志、全憩璟訳（2008）『李明博自伝』　新潮文庫

有田伸（2006）『韓国の教育と社会階層：「学歴社会」への実証的アプローチ』東京大学出版会

尹敬勲（2010）『韓国の教育格差と教育政策：韓国の社会教育・生涯教育政策の歴史的展開と構造的特質』大学教育出版

李善惠（2009）『近代初期における韓国のプロテスタント社会事業に関する一考察』

参考 URL

韓国旅行「コネスト」　2005 年　韓国統計庁による人口住宅総調査

http://www.konest.com/contents/korean_life_detail.html?id=2531（2012/12/3）

独立行政法人　労働政策研究・研修機構　データブック国際労働機構 2009、2012

http://www.jil.go.jp/kokunai/statistics/databook/2009/ch8.html（2012/12/4）

1